

種から花へ、花から虫へ

この事例は、「園庭の虫や花に興味をもった子どもたちが、友達と情報を伝え合い、共有しながら興味を深め、さらに表現活動へと繋がった」実践です。2つの事例はどちらも、子どもの素朴な疑問がきっかけとなって展開しています。それらを保育者が大切に見守り、受け止めたことで、子どもたちの興味が深まって、豊かな体験に展開しています。〈保育者の気付き〉という視点をもったことで、子ども理解の深まりと、次の展開への方向性をもつことに繋がっていったことがわかります。

社会福祉法人徳雲福祉会 千代川保育園

4～5歳児

事例1 虫ってどこに住んでいるの？ 4歳児 4月～9月

進級したことが嬉しく、毎日張り切って生活している子どもたちは、自然に囲まれた環境の中で、好奇心を発揮して遊んでいる。特に興味をもっているのが虫である。園庭や畑での虫探しに夢中になり、追いかけたり、触ってみたりする中で、**虫はどこにいるのか、どんな場所に住んでいるのか興味**をもち始めた。



Aさん：「畑にはどんな虫がいるかな？」と、ワクワクしながら虫探しが始まった。
 Bさん：「畑には土がいっぱいあるね」
 Cさん：「ちょっと掘ってみよう」と、虫を探してみる。たくさん虫が出てきた。

〈保育者の気付き〉
 今までの経験から、虫のいそうな場所を思い出し、子どもたちだけで場所や理由などを考え出していた。自分の発見や気持ちに共感してくれる友達の存在が大きく、より仲間を意識したようだった。知りたい気持ちが高まり、行動に移す姿が頼もしかった。



・様々な場所で虫の発見を楽しんだ子どもたち。
なぜその場所に虫が住んでいるのか予想し始めた。図鑑で調べたり、もう一度じっくりと虫を観察したり、保育者に聞いたり、子どもたちなりの考えを深めていく姿が見られた。
 Dさん：「この足で落ち葉や土の中を掘って、食べ物を探していたんだね」
 Eさん：「ダンゴムシが丸くなるのは、他の虫から自分の身を守るためなんだね」

〈保育者の気付き〉
 予想していたことと、調べた結果を結び付ける姿が見られた。新たな発見をし、驚きや分かった喜びを感じていた。そして、調べる間に虫の特性について興味をもち始めた。



・虫の様子を友達や保育者に身振り手振りで伝えるうちに、その虫になりきって遊ぶことに興味をもつ。
 Dさん：「バッタはこうやって飛ぶよ」
 Eさん：「トンボみたいに羽を広げて飛ぼう」
 Fさん：「手を伸ばすと早く走れる！」
 ・身近な素材である新聞紙や広告用紙を使って、虫に変身して遊ぶようになった。



表現へ



〈保育者の気付き〉
 なりたい虫になるために、工夫を凝らし作り上げていく。特徴を捉え、虫になりきって遊ぶことで、より身近に感じられたようだ。「こんな動きをするんだよ」「こんな風に飛ぶんだよ」と自分たちで探し出した答えや、分かったことを伝え合う喜びを感じていた。

事例2 種って不思議だね 5歳児 4月～9月

4月、進級写真の撮影をしている時、辺りに桜の花びらが散っていることに気付いた。Aさんが、「花びらは、1、2、3、4、5。全部で5枚ある」と気付く。周りの子どもたちの、花を見る視点が変わった。



種や



表現へ



<保育者の気付き>

子どもたちにとって、今まで花は、摘んで「きれい」と見るものだったのが、花の種類によって花びらの枚数が違うのではないだろうか、他の花は何枚なのかという興味・関心の対象へと変わった。

・様々な草花に親しみをもったある日、Bさんがタンポポを家庭に持ち帰って花びらを数えてきた。

Bさん：「タンポポの花びら184枚」と言うとき…

・「一人で、数えたのすごい！」「どうやって数えたん？」と興味津々に聞く子どもたち。他の植物で花びらの多い草花にも興味をもち、数えるようになる。数える友達が増えると、役割分担をするようになっていった。

・数え方を工夫したり、様々な場から花を摘んできて数えてみたりと、周りの花々に今まで以上に目を凝らしたことで、初めて「アザミ」と出会った。「痛い」「うわっ。トゲトゲしてる」「きれいな紫色や」

・そこから毎日、観察が続いた。花びらから茶色いフワフワしたものに変化し始め、どんどん増えていき、周りの花も茶色くなってきた。増えたフワフワは、今にも飛んでいきそう。触ってみると「種」であることが分かり、子どもたちは感動していた。

<保育者の気付き>

次第に変化していくアザミの観察を楽しみにしていた。フワフワの部分に触って観察してみると「種」だと分かり、タンポポの綿毛と同じ種類だと分類していた。

・ある日、不思議な形の花「ネジバナ」を初めて見つけた。とっても可愛い花に大喜びの子どもたち。

・「私も見付けたい」「どこにあるのだろう」と探し始める。しかし、なかなか見付けられない…。そこで、どこにどんな花が咲いているか、地図を作ることをつらめた。

・保育園にどんな花が咲いているか、思い出しながら地図作りが始まった。花の特徴を捉え、描き進めていくと、カラフルで花への思いが伝わってくる地図が完成した。

・子どもたちは、「木に咲く花」と「プランターに咲く花」と「地面に咲く花」の分別をしていた。地面に咲く花の種類が圧倒的に多いことから、より興味をもった。子どもたちが「何でだろう」と疑問に思うと同時に「種がいっぱいあるからや」という意見が飛び出した。

<保育者の気付き>

子どもから、「種がいっぱいあるからや」と発言があったのは、花びらの枚数を数える経験をしたからだと思う。また、アザミの観察からは、花びらは種になることを知ることができた。

[考察] 4歳児は、興味の対象の特性を知りたいという気持ちが強く、予想を立てる面白さや、調べたことを友達に伝えて情報を共有するなどの楽しさを味わった。虫の観察により虫に愛着をもつことができ、実体験を通して、小さな虫にも命があることや、命の大切さを感じ取っていたのではないかと思う。

5歳児は、「桜の花びらは5枚」という一人のつぶやきから、様々な花に関心を広げ、枚数を数えることを楽しんだ。花を観察をすることで、「種から育つ花」だけではなく「花からできる種」があることを知ることができた。そして、「その種が飛んでいることや、新たな花を見つけたことできっかけに始まった地図作り」へと展開する中で、命の繋がりを感じ、豊かな表現活動に結び付いた。